



家財整理という生活支援 ——現場と制度の交差点

第4回 家庭に眠る資産



㈱エブリン 経営戦略室室長
兼 那須烏山支店長
亀田考明



対象だったものが、市場へ持ち込まれた途端、再び商品として扱われる。こうした国内市場が、家財整理業者にとって重要な「出口」になっていることを実感した。

家財整理業者は、家の中から品物を選び出せば仕事が終わるわけではない。国内で販売するのか、海外へ輸出するのか、資源として回収するのか、廃棄物として処理するのか。出口の確保は、業者の収益だけでなく、処分されるごみの量にも直結する。ある東北地方の家財整理業者は、

「以前なら捨てていたものでも、いまは市場に出せば値段が付く。処分費を減らせるうえ、販売が第二の収入源にもなりつつある」と話した。

家財整理業は、作業料金を受け取って家を空にするだけの仕事から、家財の価値を見極め、再流通させる仕事へと変化している。売却できれば処分費を抑え、買取額として依頼者へ還元することもできる。家財を不要品ではなく資産として捉えることは、双方に利益をもたらす。

こうした意識は、依頼者の側にも広がっている。

「捨てる前に、売れるものがないか見てほしい」と見積もり時に頼まれることが増えている。メルカリな

どのフリマアプリが普及し、自分には不要でも、別の誰かには価値があるという感覚が定着したことも大きいだろう。

家の中には、所有者自身が気付いていない資産が眠っている。ブランド品や骨董品に限らず、古いカメラや工具、食器、家具なども、売り方によって価値を持つ。

東京で今月開かれた日本リユース機構の総会で、環境省の担当者は、家庭の不要品を資産として捉えることについて、「眠っていた資産を活用し、経済を活性化させることにながる」と強調した。

◇ ◇ ◇

6月下旬、環境省が公表した「消費者が利用しやすい効率的なりユース品の回収に関するモデル実証事業」に、当社が提案した「リユース拠点「捨てずに・ランド」構築事業」が採択された。

栃木県那須塩原市のクリーンセンター駐車場内にリユース品の受入拠点を設置し、市民が持ち込む前の家具や生活用品を受け入れ、再利用可能なものを選別する。回収品は、国内のリユース市場などを通じて再流通させる。家庭から持ち出された品物を、廃棄物として処理される直前

の「水際」で食い止める仕組みだ。

廃棄物処理施設はこれまで、家庭から排出されたものを適正に処理する役割を担ってきた。今回の事業は、その手前にリユースの選択肢を設け、「ごみの終着点」を再流通への分岐点に変えようとする試みでもある。

家財は、家庭から持ち出された瞬間にごみになるわけではない。価値を見極める人と、次の使い手につながる出口があれば、ごみとして扱われてしまう。道具市場で落札されていた品々も、適切な出口がなければ処分されていたかもしれない。「捨てずに・ランド」は、その出口へつなぐ入口となる。

家庭に眠る資産を発見し、ごみになる前に社会へ戻す。その水際に立つことが、これからの家財整理業者に求められる役割ではないだろうか。W

亀田考明 (かめだ たかあき)

2018年に大手新聞社に入社後、栃木県政キャップや本社政治部などを担当。記者時代の取材を通じて、ダイヤモンド・プリンセス号のコロナ除菌を手がけたエブリンと出会う。昨年7月、「超高齢社会の最前線を見たい」との思いから一念発起し、家財整理・遺品整理業界へ。同社の経営戦略室長として企業戦略の立案・実行に携わる傍ら、孤独死やセルフネグレクト、廃棄物問題など、さまざまな現場から情報を発信している。とちぎ未来大使。